

2008年度 統計関連学会連合大会 (2008 年 9 月 08 日・慶應大学)

Shrinkage estimators for large covariance matrices in multivariate normal distributions

日本女子大学理学部 今野 良彦

September 9, 2008

この講演の目的と構成

近年，データ数よりも変量の次元が高いデータ（高次元データ）の解析のための多変量推測理論の構築が注目を集めている．本講演では，高次元データの設定のもとで多変量正規分布の共分散行列 (Large Covariance matrix) の推定問題を統計的決定理論の枠組みで考察した結果を報告する．

本講演の構成

- (1) 記号と問題設定.
- (2) 先行研究について .
- (3) リスクの不偏推定法 (SURE) .
- (4) 改良型推定量について .

記号と問題設定 (1)

★ $X_1, X_2, \dots, X_n \sim N_p(0, \Sigma)$. 各 X_i ($i = 1, 2, \dots, n$) は p 変量確率 (縦) ベクトルで, 独立同一に p 変量正規分布に従う. ただし, Σ は $p \times p$ の正値対称行列で未知.

★ n は (標本数 - 1) で, p は変量の次元.

★ Wishart 確率行列 ($p \times p$ の行列) $S := \sum_{k=1}^n X_k X_k'$. ただし, “'” はベクトルや行列の転置を示す.

★ 共分散行列 Σ の推定問題を損失関数

$$L(\hat{\Sigma}, \Sigma) = \text{Tr} (\hat{\Sigma} \Sigma^{-1} - I_p)^2$$

のもとで考える. ここで, $\hat{\Sigma}$ は Σ の推定量, I_p は $p \times p$ の単位行列, Tr は行列のトレースを表す.

★ S の分布に関する損失関数 L の期待値 $R(\hat{\Sigma}, \Sigma) := \mathbb{E}[L(\hat{\Sigma}, \Sigma)]$ をリスクとよぶ. Σ に関して一様に推定量のリスクを比較したい.

記号と問題設定(2)

- ★ 平均を 0 としたことは本質的ではない .
- ★ Wishart 確率行列 S は正定値 $\iff n \geq p$.
- ★ Wishart 確率行列 S の分布は常に存在するが , $p \times p$ の対称行列の空間上の Lebesgue 測度に関する確率密度関数は $n \geq p$ のとき存在 .
- ★ 変換 $\hat{\Sigma} \mapsto A\hat{\Sigma}A'$; $\Sigma \mapsto A\Sigma A'$ (A は $p \times p$ の正則行列) に関して不変な損失関数 :

$$L(\hat{\Sigma}, \Sigma) = \text{Tr}(\hat{\Sigma}\Sigma^{-1} - I_p)^2; L_S(\hat{\Sigma}, \Sigma) = \text{Tr}(\hat{\Sigma}\Sigma^{-1}) - \log \text{Det}(\hat{\Sigma}\Sigma^{-1}) - p.$$

ただし , Det は行列式 . しかし , $n < p$ のとき , L_S (L_S の期待値) は $n^{-1}S$ を評価できない .

先行研究について(1)

推定量 $n^{-1}S$ の問題点

- ★ $\mathbb{E}[n^{-1}S] = \Sigma$ だが, $n^{-1}S$ の固有根は, Σ の固有根よりも広がっている.
- ★ $n < p$ のとき, Σ は正定値であるにもかかわらず, $n^{-1}S$ は正定値ではない.

$n \geq p$ の場合の先行研究

- ★ 損失関数 L_S のもとでは, $n^{-1}S$ の固有根を Shrinkage-expansion method を用いた改良型推定量. Stein (1977), Dey and Srivastava (1985), Haff (1991) 等を参照.
- ★ リスクを評価するために, SURE 法が有効 — 部分積分の公式と eigenvalue-calculus → $n < p$ の場合は?
- ★ 損失関数 L のもとでは, Haff (1980) の結果 → $n < p$ の場合は?

先行研究について (2)

$n < p$ の場合の先行研究

- ★ Ledoit and Wolf (2004): 損失関数 $\text{Tr}(\hat{\Sigma} - \Sigma)^2$ のもとで, $n^{-1}S$ と I_p の線形結合のなかで漸近的 (n/p は有界) に最適なもの. 積率の条件のみで分布に依存しない結果.
- ★ Wu and Pourahmadi (2003), Bickel and Levina (2008): banding approach. 漸近的に評価.
- ★ Furrer and Bengtsson (2007): “tapering”.

部分積分の公式と SURE 法 (1)

★ 分解 $S = O_1 L O_1'$. ここで, $L = \text{Diag}(l_1, l_2, \dots, l_n)$, $l_1 > l_2 > \dots > l_n > 0$ は S の固有値, O_1 は $p \times n$ の半直交行列, i.e., $O_1' O_1 = I_n$.

★ 推定量

$$\hat{\Sigma} = O_1 \Phi(L) O_1',$$

を考える. ただし,

$$\Phi := \Phi(L) = \text{Diag}(\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_n),$$

$\varphi_k := \varphi_k(L)$ ($k = 1, 2, \dots, n$) は $\mathbb{R}_{>0}^n$ から \mathbb{R} への部分可能な関数.

部分積分の公式と SURE 法 (2)

SURE $n + 1 < p$ とする . 適当な条件のもと

$$\begin{aligned}
 R(\mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1, \Sigma) &= \mathbb{E}[\text{Tr} \{ \Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1 \Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1 \} \\
 &\quad - 2 \text{Tr} \{ \Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1 \} + p] \\
 &= \mathbb{E} \left[\sum_{k=1}^n \left\{ (p - n - 1) \left(\frac{\varphi_k^{(1)}}{\ell_k} - 2 \frac{\varphi_k}{\ell_k} \right) + 2 \left(\frac{\partial \varphi_k^{(1)}}{\partial \ell_k} - 2 \frac{\partial \varphi_k}{\partial \ell_k} \right) \right. \right. \\
 &\quad \left. \left. + \sum_{b \neq k}^n \frac{(\varphi_k^{(1)} - 2\varphi_k) - (\varphi_b^{(1)} - 2\varphi_b)}{\ell_k - \ell_b} \right\} + p \right],
 \end{aligned}$$

ただし , $\varphi_k^{(1)} = (p - n - 1) \varphi_k^2 / \ell_k + 4 \varphi_k (\partial \varphi_k / \partial \ell_k) + 2 \varphi_k \sum_{b \neq k}^n (\varphi_k - \varphi_b) / (\ell_k - \ell_b)$
 $(k = 1, 2, \dots, n)$.

改良型推定量 (1)

推定量の族

$n + 1 < p$ とする . つぎの推定量の族を考える :

$$\hat{\Sigma}_t = \frac{1}{p + n + 1} \left(S + \frac{t}{\text{Tr } S^+} O_1 O_1' \right).$$

ただし , O_1 は $p \times n$ の半直交行列で , S の正の固有値に対応する固有ベクトルを並べたのもの , S^+ は S の Moore-Penrose の逆行列 , t は正の定数である .

結果

$\hat{\Sigma}_t$ のリスクの不偏推定量 (SURE) を導出し , リスクを評価することにより次の結果を得る .

$0 < t < 2(n - 1)(p - n - 1) / \{(p - n + 1)(p - n + 3)\}$ のとき , すべての Σ に対して , $R(\hat{\Sigma}_t, \Sigma) \leq R(n^{-1}S, \Sigma)$ が成立する .

改良型推定量 (2)

★ $\hat{\Sigma}_t$ は正定値ではない .

★ $\frac{1}{p+n+1} \left(S + \frac{t}{\text{Tr } S^+} O_1 O_1' \right)$ を修正したもの:

$$\tilde{\Sigma}_t = \frac{1}{p+n+1} \left\{ S + \frac{t}{\text{Tr } S} I_p \right\}.$$

★ 残念なことに , 推定量 $\tilde{\Sigma}_t$ のリスクを SURE を用いて評価できない !

★ 数値実験で調べた結果 , $\tilde{\Sigma}_t$ は $n^{-1}S$ と $(p+n+1)^{-1}S$ を改良しているだろう .

★ Σ の固有根が散らばると改良率はあがる !

★ 複素 Wishart 行列に対しても同様な結果を得ることができる !

余談

★ Kubokawa and Srivastava (2008): $\Phi = \text{Diag}(\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_n)$ に対し ,

$$\mathbb{E} [\text{Tr} \{ \Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi \mathbf{O}'_1 \}] = \mathbb{E} \left[\sum_{k=1}^n \left\{ (p - n - 1) \frac{\phi_k}{\ell_k} + 2 \frac{\partial \phi_k}{\partial \ell_k} + \sum_{b \neq k}^n \frac{\phi_k - \phi_b}{\ell_k - \ell_b} \right\} \right].$$

★ $\mathbb{E} [\text{Tr} (\Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1 \Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi(\mathbf{L}) \mathbf{O}'_1)]$ を評価するために , Tr をはずしたい!

★ Matrix form の等式 :

$$\mathbb{E} [\Sigma^{-1} \mathbf{O}_1 \Phi \mathbf{O}'_1] = \mathbb{E} \left[\mathbf{O}_1 \Psi^{(1r)} \mathbf{O}'_1 + \text{Tr} (\mathbf{L}^{-1} \Phi) (\mathbf{I}_p - \mathbf{O}_1 \mathbf{O}'_1) \right].$$

ただし , $\Psi^{(1r)} = \text{Diag}(\phi_1^{(1r)}, \phi_2^{(1r)}, \dots, \phi_n^{(1r)})$ ($k = 1, 2, \dots, n$) で

$$\phi_k^{(1r)} = \sum_{b \neq k}^n (\phi_k - \phi_b) / (\ell_k - \ell_b) + 2(\partial \phi_k / \partial \ell_k) - \phi_k / \ell_k.$$